



廣瀬川

第103号

令和5年
2月15日

仙台市小学校長会

発行者／田辺 泰宏（会長） 責任者／佐藤 正文（広報部長）

主張

一人一人に光を 一人一人を光に



副会長 原 新太郎（木町通小学校）

私が勤務していた小学校にAさんが入学してきたのは、今からもう30年近くも前のことです。Aさんが話せる言葉は一つもなく、まだおむつをしていました。そんなAさんに対して「どんな支援ができるのだろうか」「どんな光を当てたらいいのだろうか」と、私たちは悩みながら日々を送っていました。

Aさんには得意なことが一つありました。それは回せそうなものなら何でも回してしまうという技です。例えば、お椀、お皿、バケツのふた…。手に取っては器用な手つきでクイッとひねり、見事に回してしまいます。そのときの得意満面のAさんの笑顔と言ったら…。私たちは「この得意技が何かもっと役に立つようなことだったら良かったのに」と言いながらAさんの笑顔を見ていたものでした。

ある日の休み時間、子供たちが集まって「すごい」「おもしろい！」と歓声をあげています。その中心にいたのはAさんでした。子供たちはAさんの得意技を見て大喜びです。何の役にも立ちそうにないことが、いまAさんの前にいるたくさんの子供たちの笑顔と楽しい気持ちを引き出していたのでした。

私たちは障害のある子供たちに対して、障害に起因する苦手なところを改善・克服させて、少しでもほかの子供たちに近付けさせたい、と考えていました。それは誤りではないかもしれませんが、それと同じくらい大切なことは、一人一人が持っているもの

を見付け、そこに価値を見出し、一人一人を周りの人々にとって輝く存在、つまり「光」にしていくことです。

内閣府の「子供・若者の意識に関する調査」によれば、「自分は役に立たないと強く感じる」という子供や若者が、全体のおよそ50%に上るという結果が示されています。学校を振り返れば、心身の障害だけではなく、不登校、いじめ、LGBT、児童虐待、貧困など様々な課題を有し、自分に対してポジティブな感情を持ちにくく、特別な配慮を必要としている子供たちがたくさんいます。全ての子供たちが「配慮を要する子供」と言えるかもしれません。

私たちがしなければいけないことは、子供たちの多様性をありのままに受け止め、「一人一人に光を」というアプローチだけではなく、「一人一人を光に」というアプローチを大事にすることです。そして校長としてこのことを職員に訴え、それぞれの教室で一人一人を光にしていく営みを工夫し、実践し続けていく学校、そして社会をつくることです。

先日Aさんのお母さんとお話をしました。「Aはおじさんになりましたが相変わらずです。昨日も灰皿を回してみんなを笑わせていましたよ。」とのこと。ささやかではあっても、みんなを笑顔にする力を持っているAさんは、間違いなく周囲の人たちにとって「光」になっています。

内 容

○主 張	1
○特 集	2
○座 談	4
○提 言	16

○学区紹介	18
○研究部から	19
○生徒指導部から	21
○新任校長所感	22
○編集後記	24

特集 新たな試みへ挑み、実施する研究大会**未来をつくりだす力をはぐくむ図工・美術**

～第66回東北造形教育研究大会宮城大会・
第68回宮城県造形教育研究大会仙台市大会を振り返って～

図画工作研究部会 会長 星 恭典（福室小学校）

令和4年10月28日、第66回東北造形教育研究大会宮城大会並びに第68回宮城県造形教育研究大会仙台市大会が、日立システムズホール仙台を会場とし、オンラインによるハイブリッド方式で開催された。

仙台市内の教員は会場に参集し、他県・市町村参加者には会場の様子をオンラインで配信した。これは、大会実行委員が中心となり、コロナ禍での開催の在り方を模索する中で生まれた形態である。オンラインによる配信作業も、教員自らが機材調達・準備等を行うなど、試行錯誤を繰り返しながらの開催となった。当日は、オンラインも含め約170名の参加があり、研究成果をより広く周知することにつながったと考える。

本大会の研究テーマは、「夢・色・形 未来をつくりだす力をはぐくむ～つくり つくりかえ つくる～」であり、幼稚園、小学校、中学校、高等学校の校種を超えた10の実践発表・研究協議を行った。また、講評・講話を、文部科学省初等中等教育局教育課程課 小林恭代教科調査官、同じく平田朝一教科調査官から頂戴した。両調査官からは、大会実施への労いや励ましと併せて、学習指導要領に示された美術科・図画工作科が目指すべき方向性について改めて分かりやすく講話をいただいた。今後、本部会の研究推進にあたり、大きな指針を得ることができたと考える。

なお、本稿では、主に小学校に関する部分での報告とする。

1 実践発表

小学校からは、「絵」「造形遊び」「工作」「鑑賞」の4領域での実践発表を行った。どの領域においても、研究テーマに向けた効果的な指導を目指すため、「深い学び」「資質・能力の相互関連」「言語活動の充実やICTの活用」の三つを重視し、研究の視点として取り組んだ。

特に、「資質・能力の相互関連」については、資質・能力を「行きつ 戻りつ」させながら学習し制作を進めていく学びに向かう主体的な様子を、大会のサブテーマでもある「つくり つくりかえ つく

る」と表現し指導案中にも明確に位置付け、それぞれの段階を意識した学習展開の工夫を行った。

また、ICT機器を活用した作品の紹介や鑑賞の活動を通じて、自分の思いを伝える・友達の思いを聞く場面を取り入れるなど、言語活動の充実も図った。

2 分科会・研究協議

それぞれの分科会では、会場からだけではなくオンラインによる他県等からの意見・質問も含めて研究協議が行われた。

実際の協議は、研究の視点に沿って行われたが、特に、児童の思いが、「つくり」「つくりかえ」「つくる」を行き来しながら発展していくための手立ての在り方に関連する話題が多く取り上げられた。具体的な手立てとして、授業のねらいに即した「教師からの声掛け」「鑑賞の場づくり」「ICTの活用」「一言カード」などの有効性が確認された。また同時に、それらを通じて、改めて「どんな力を身に付けさせたいのか」ということを常に意識しながら学習指導をしていくことの重要性が、参加者同士で確認される分科会となった。

3 今後に向けて

大会を通して改めて実感したことは、現在がコロナ禍を含め先の見通せない状況であるからこそ、自分が表したいことを追求し自己と向き合いながら行われる造形活動がいかに重要かということである。その活動の中には、「試行錯誤」や「創意工夫」という自分と向き合う過程が必要であり、それこそ正に未来をつくりだす原動力だと考える。本大会開催にあたり、主催者である私たち自身が、その力を問われたとも言える。

今後も、本大会の成果や課題を生かし、「つくりだす喜び・創造することの喜び」を土台にしながら、子供たちに生活や社会の中の美術と豊かに関わる力の育成を目指す研究に取り組んでいきたい。



特集 新たな試みへ挑み、実施する研究大会

豊かな言葉の力を身に付ける国語科教育を目指して ～“つなぐ・つながる”を意識した、仲間と共に主体的に学ぶ場づくり～

国語研究部会 会長 浅野 郁子（上野山小学校）

1 はじめに

令和元年度に第65回東北地区国語教育研究大会宮城大会を終え、「6年後は仙台市で全国大会」の新たな目標に向かってスタートを切ろうとしていたとき、新型コロナウイルスの感染拡大により、社会全体が三密回避の「新しい生活様式」を求められた。教科研究会も活動休止を余儀なくされ2年が経過した。

また、令和4年度仙台市開催予定の宮連小国語教育研究大会や宮城県小中高国語連絡協議会は、令和5年度の実施が既に決まっていた。

活動再開の今年度は、スタートの段階で「研究会で学びたいこと」をアンケートにより集約し、仙小教研国語部員全248名がよりよく“つなぐ・つながる”を意識した「読むこと」の力を付ける授業づくりを目指して研究会を進めてきた。

以下、状況の変化に対応しながら、若手教員の育成と仲間と共に主体的に学び合う場づくりに向けて、新たな試みへ挑み、実施してきた国語科研究会について述べたい。

2 今年度の活動

(1) 研究主題

深い学びを目指す国語科授業の創造

～「言葉による見方・考え方」をはたらかせて～

(2) 活動内容

- 6月 第1回常任委員会（参集せず）
第1回定例全体会（講演会）
 - ・会場 仙台市立長町南小学校
 - ・講師 宮城教育大学 児玉 忠 教授
 - ・演題 「国語科物語文指導の課題」
- 7月 第1回研究会運営協議・研修会
- 8月 「国語教育研究紀要59号」編集委員会
- 9月 「作文宮城71号」仙台市審査会
 - ・応募総数270点（散文216点・詩54点）
 - ・市入選 87点（散文59点・詩28点）
- 第2回常任委員会・研修会(教材研究会)
- 10月 第2回定例全体会（授業づくり研修会）
 - ・会場 仙台市教育センター
 - ・内容

①学年ごとの教材研究（物語文）

講師 新田小学校 濫谷 貴子 教頭

②「読むこと」の授業づくり

講師 教育センター 相澤 遼 指導主事



- 11月 「作文宮城71号」県審査会
- 12月 第2回研究会運営協議・研修会
- 1月 第3回常任委員会及び研修会
 - ・第3回研修会の持ち方・係分担
 - 第3回定例全体会(学年ごとの実践発表会)
 - ・会場 仙台市立長町南小学校(6教室)
 - ・学年代表2名による実践発表と、学年ごと参加者の実践も各教室にて共有した。

3 活動を振り返って

研究会が再開できたとはいえ参集しての授業研究会は見送られ、感染症対策を取りながらの新たな試みが求められた。今年度の方向性を決めるに当たっては、前年度まで活動再開に向けて尽力してくださった前部会長を始め、会長・副会長を中心にした運営協議・研修会が大きな力を発揮した。若手教員の育成とベテラン教員の“技の継承”という課題を改善し、主体的に協働で学ぶ場づくりをねらいとし、“話したい・聞きたい・学びたい”が実現できる研究会となるよう工夫してきた。初めは緊張して表情が硬かった先生方が笑顔で周りの先生と語り合う姿から、学び合う場を求めていたことを痛感させられた。

令和7年度に第55回全国小学校国語教育研究会が仙台市で予定されている。子供たちに豊かな言葉の力を身に付ける国語科授業を求める先生方と、互いに磨き合う研究会をこれからも推進していきたい。

座談会

「仙台版コミュニティ・スクールの
運営の実際と課題」

●とき 令和4年10月25日(火) ●ところ 仙台市教育センター

【挨拶】田辺会長

この座談会は長きにわたって続いてきており、貴重な私たちの意見の集約、そして研修の場として、これまで諸先輩方が築き上げてられました。なかでも震災後の10年間においては、防災教育を含めて、避難所開設関係や教育の復興というところ議論をいただきました。そのおかげもあり、今回発行した「つなごう ～3.11から未来へ～」の中にも10年間の軌跡ということで、まとめさせていただきました。先輩方が災害に対して、あるいは防災に対して、どのように取り組んでいくべきかという視点で我々に示唆を与えてくださいました。



今回はコミュニティ・スクール(以下CS)がテーマということで、待ったなしの状況になっています。私たちが研修を積むと同時に各学校、地域への周知、それから協力、連携・協働をこれから一段とスピードを加速させて進めなければなりません。

是非この座談会が校長先生方への示唆になるように、短い時間ではありますが、先生方のお知恵をたくさん頂戴したいと思います。本日はどうぞよろしくお願ひいたします。

さて、本市におけるCS導入の検討は、国の方向性を見定め、平成30年度から教育委員会において始まりました。有識者及び小中学校長、地域関係者、保護者、学校支援地域本部関係者らで「コミュニティ・スクール検討委員会」を立ち上げ、本市の実状に合ったCSの在り方について、2年間にわたる検討・協議を行いました。

その結果、教育委員会として、検討委員会の提言を基に、令和2年度からCSの導入を順次進め、令和5年4月には全ての市立学校・園がCSとなることを目指すこととなりました。

仙台市小学校長会としては、当初、導入に向けては、一定の理解は示しているものの、これまで取り組んできた学校支援地域本部事業が充実している状況下で、CSの本来のねらいや趣旨が浸透するの、また、多忙化の中での導入手順や手続きがスムーズにできるのかなどの不安があったと聞いています。聞いていますという表現になったのは、本市へのCS導入を決定したとき、私は、教育委員会で正にCS担当をしていたからです。当時は、「地域とともに歩む学校づくり」の取組が成熟し、子供たちの豊かな学びが多く为学校で実現されており、学校としては、地域との連携がうまく機能していると自信を持っていたところでした。その中でのCS導入でしたので、学校現場からのある程度の疑問符が出てくることは予想していました。

ただ、国の法改正を伴ったCS推進の方向性があるので、その流れにこれまで本市が培ってきた「地域とともに歩む学校づくり」での取組やその成果を融合させて、本市らしいCS、「仙台版CS」を構築していくことが、子供たちの育ちや地域にとって何より大切であると考えていました。

教育委員会にいたときに、CSを導入する上で難しいと思ったことは、CS導入の必要性を感じていない校長が多いことでした。裏を返せば、これまでの地域との取組で、教育環境が充実し、子供たちがよく育っているという表れでもあります。

しかし、これは一時の学びの充実であって、その地域に深く根ざしていくものではないような気がします。「育む子ども像」を学校・家庭・地域で共有し、連携・協働して取り組むことを繰り返すことで、地域に浸透し、長きにわたり子供たちを育もうとする土壌が出来上がるものと思っています。それがCSを導入する最大のメリットだと信じています。

私たち校長は、今の学校や地域のことだけを考え

<出席者>

蓮 沼 秀 行

(仙台市教育委員会
学びの連携推進室長)

田 辺 泰 宏

(仙台市小学校長会会長
仙台市立荒町小学校長)

伊 藤 公 一

(仙台市立幸町南小学校長)

高 橋 研

(仙台市立茂庭台小学校長)

菅 澤 美香子

(仙台市立北仙台小学校長)

玉 水 修

(仙台市立西山小学校長)

佐 藤 正 文

(仙台市小学校長会広報部長
仙台市立通町小学校長)司会
多賀野 修 久(仙台市小学校長会広報部
仙台市立榴岡小学校長)

るのではなく、将来の学校や子供たちを取り巻く地域環境、教育環境も考慮していく責任があることから、CS導入は必須であると思います。

あと半年で、数十校へのCS導入を計画していると聞いています。導入時期の早かった学校は、既に次のステージ、いわゆる運営面での充実が求められるようになってきたと同時に課題も見えてきたものと思います。

本日は、仙台市教育委員会より学びの連携推進室の蓮沼室長においでいただいております。蓮沼室長は、校長在任時にはCSを立ち上げ、地域と一体となった教育環境の創出に奔走していらっしゃいました。また、本市CS事業推進の要として、大所高所からお話をお伺いできるものと期待しています。

お集まりの校長先生方におかれては、各学校において先進的な取組をされているとともに、課題も見えつつあるのではないのでしょうか。各校におけるCSのこれからの方向性や校長としての思いもお話しいただければ幸いです。

本日は、どうぞよろしく願いいたします。

佐藤広報部長

仙台市小学校長会・広報部では、今年度も「危機対応力の育成と今日的課題への対応とおし未来を切り拓く児童を育む学校経営」というテーマで会報『廣瀬川』の編集を進めております。



今回の座談会の柱となる、仙台版CSですが、今月現在で100校以上の学校に既に設置されているとの報告がされております。今後、今年度中に90校余りの学校で導入され、いよいよ来年度から市内全ての学校で導入・設置となります。昨年度の座談会では、CSの立ち上げまでの流れや、CSが持つ可能

性について先進校の取組の紹介をいただきました。今回は、「仙台版CSの運営と実際」をテーマに、お話を伺いたいと思います。

進行に際して、まずは、仙台版CSの運営について、特に、仙台版CSの全校導入への期待とこれからの展開について、本事業を担当されております、教育局学びの連携推進室室長の蓮沼秀行様よりお話をいただきたいと存じます。

それを受け、CSの運営の実際と課題について、既にCSを導入し、何度か運営協議会を重ねられている先進校の校長先生方からお話を伺いたいと思います。

一つは、「運営の実際」について。もう一つは、「運営の課題」です。

地域総ぐるみでの教育の実現のため、運営協議会における取組の具体として熟議をどのように計画し、行っているのか、また協議会を実施する上で校長として大切にしたことや更に回を重ねることによって明らかとなる課題について、先進校の校長の立場から、御示唆を得たいと考えております。

以上のように、御出席の皆様には、これまでの実践について御紹介いただき、今後私たちが取り組んでいくための指針にしたいと思います。

蓮沼室長

◆「仙台版コミュニティ・スクール」の全校導入への期待とこれからの展開について

令和2年度から導入を進めてきた仙台版CSも、10月時点で108校の導入となりました。各校で導入を進めていただき、令和5年4月には、全ての市立学校・園が仙台版CSとしてスタートを切る見通しが立ちましたこと、この場を借りて感



謝申し上げます。

さて、CSの導入は、これまでの地域や保護者と連携した取組からステージを上げて、学習指導要領改訂の理念を社会で共有し、子供たちの「生きる力」を育む学びを創出する「社会に開かれた教育課程」の実現や、これまで積み重ねてきた学校教育の取組を生かしながら、時代に応じた「令和の日本型学校教育」を実現するための必然と言えます。

7月に実施した仙台版CS導入校へのアンケートの記載では、導入により感じる変化として、地域の方や保護者の学校に関わる意識の高まりに関するものが多く、学校運営協議会の協議を重ねてきた学校ほど、その傾向が見られました。

教職員については、「地域と関りながら、教育活動を計画しようとする姿勢が見られてきた」といった「社会に開かれた教育課程」の編成に関連する回答が挙げられていました。

また、「地域とともに歩む学校づくり」についての設問では、7割ほどの学校が有効と回答していました。新型コロナウイルス感染症の影響を受けて、学校と地域・保護者で取り組む活動が激減する中、導入準備や学校運営協議会により、着任して初めて地域の方々と顔を合わせじっくり話ができたという管理職の話をよく耳にしました。こういったことが回答の背景にあると分析しています。

本市のCSの取組はまだ日が浅く、成果の実感にはもう少し時間を要します。しかしながら、学校運営方針の承認や熟議、情報発信や日常的な情報交換により、学校と地域・家庭が相互理解を深め、活動を重ねることから、学校運営協議会を核とした「地域総ぐるみで子供を育む」意識が高まっていくことを期待しています。それにより、仙台版CSでの学校づくりが進み、導入の効果も実感できると考えております。校長先生におかれましては、改めて、学校運営協議会が学校づくりのパートナーであることを御認識いただき、学校経営上の位置付けや担う役割を明確にして、良好な関係を築きながら、仙台版CSによる学校づくりをリードしていただくようお願いいたします。

また、CSが機能を発揮する前提に、協議会委員の学校運営の当事者意識の高まりや、地域社会での地域総ぐるみで子供を育む意識の浸透が挙げられま

す。

当事者意識は、学校運営協議会の三つの機能の遂行や、学校運営協議会の自立的な運営だけで高まるわけではありません。協議会委員のモチベーションを高める学校の関わり方や、協議会の活動が目的意識や意義を感じてもらえる「大人の学びの場」となっているかがポイントとなります。

地域総ぐるみで子供を育む意識の浸透には、仙台版CSの取組を地域社会に開くことが不可欠です。協議会委員とともに、地域社会に対して取組や成果を発信し、地域の声を集め、参加を求める働き掛けが必要となります。

教育委員会としては、全校導入のタイミングが仙台版CSのスタートと捉えております。今後、仙台版CSが機能していくためには、各学校への伴走支援が重要と捉えております。「運営の手引き」の作成や、教職員対象の研修とともに、引き続き、個別の状況に応じた支援を進めてまいります。

さらに、協議会委員を対象とした学習機会も欠かせないものと考えております。具体的には、学校運営協議会の連絡協議会を立ち上げ、制度理解や事例学習、課題解決に資する情報交換の機会を設定します。また、それによる学校運営協議会のネットワークづくりも進めたいと考えております。それぞれの学校運営協議会での研修や他都市の視察の支援についても予算措置を含め検討中です。

このような取組から、各校の支援に努め、仙台版CSのレベルアップと市民への周知浸透を図ってまいります。

司会<多賀野>

それではここから、一つ目の視点「CSの運営の実際」について、発表者の皆様からお話を伺ってまいります。

1 「CSの運営の実際」について

伊藤校長

学校週5日制が導入されたころから、子供の教育は学校と保護者と地域住民の三者が一体となって推進すると言われてきました。土曜日が休みとなり、地域でどうするかということでした。必ずしも実効

性あるものになっていなかったのですが、CSが導入されることにより、地域と一体となった学校づくりが充実してくると言えます。



私は、CSを立ち上げたのは、幸町南小で2回目です。1回目は、平成27年度、初任の校長として柴田町立柴田小学校に着任した1年目でした。なぜ導入したかという点、柴田小学校が60周年を迎えるという課題がありました。柴田町は船岡町と槻木町が合併してできた町です。この合併を記念してできたのが柴田小学校でした。しかし、40周年記念式は行っていたのですが、町立50周年記念は町の財政の関係で行われず、学校も50周年記念式を行いませんでした。そこで開校60周年記念をどうするのかという問題が起こり、地域住民を巻き込んだ組織作りが必要だと考え、柴田小学校運営協議会を立ち上げました。一番参考にしたのは、柴田町に宮城県で最初にCSを導入した東船岡小学校でした。その東船岡小の校長先生に相談し、また規約なども見せてもらい、協議会を立ち上げることができました。

そして、幸町南小では令和3年度の重点事項として「幸町南小学校運営協議会の設立」と「リーダー・イン・ミーの導入」を掲げ、令和3年6月に学校運営協議会を設立しました。まず、学びの連携推進室に相談し、委員の人選についてアドバイスをいただきました。そして、5年間PTA会長を務めた前PTA会長に相談し、人選をしました。その後、私自身が個別に委員候補者の方々を訪問し、趣旨の説明やお願いをして回りました。皆さんに御協力いただけるという返事をいただき、メンバーが決定しました。この人選で気を付けたことは、子供と接点があり子供の様子をよく知っているということです。具体的には、幼稚園の園長先生、民生委員児童委員、児童館長、市民センター長、連合町内会長、学校支援地域本部スーパーバイザー、さわやか相談員、元校長、PTA関係者などです。

本校学区では、ちょうど立ち上げの頃、連合町内会での課題がありました。具体的には、申し上げられませんが、そんな折の設立でしたので、一番大切にすることは委員の皆様の意思疎通を図り、お互い

に仲良くなってもらうことでした。つまり、委員の皆さんの関係性がとても大事だということです。そして、この協議会を通じて、情報交換ができれば子供たちの学校生活にいい影響を与えるのではないかと考えました。

具体的な取組を一つお話しいたします。熟議の内容についてです。「地域でどのような子供を育てていきたいか」というテーマで、キーワードを挨拶・地域・人間関係として話し合っただけで熟議をしました。3～4人のグループで話し合っただけで、そのあと全体共有しました。「挨拶」では地域で知っている人を増やす工夫をすることでもっと挨拶ができるようになる。「挨拶通り」等の取組をしてはどうか。「地域」では、地域からの情報発信に努めたい。地域を知るアクティブな学びを期待する。地域の素材を生かした学習活動を社会学級が橋渡しになり、進めてもらいたい。三つ目の「人間関係」ではコロナ禍での児童のコミュニケーション不足が心配なので、現状でできる創意工夫をみんなで考えていこう。学校、家庭、地域において孤立させない人間関係づくりが大事である。そのような熟議を行いました。

高橋校長

本校（茂庭台小）の学校運営協議会は令和3年8月に設置され、今年度で2年目を迎えました。着任当初から、茂庭台中学校長は協議会の設置を切望して



いました。地域に学校を応援したいという機運があり、地域の方が子供たちを茂庭台全体で育てていきたいという強い願いを持っていることが大きな理由でした。これまでも小学校と中学校が連携しながら教育活動を進めてきたこともあり、小中合同で一つの学校運営協議会を組織することの合意は速やかでした。また、連合町内会長が常に言われている「子供は地域の宝」を合言葉にして、学校運営協議会を大人がどのような意識を持ち、具体的にどんな関わりをするのかといった「作戦会議」にすることも共通認識できました。

小中ともに児童生徒の課題として認識していたのは「自己肯定感の低さ」です。学校、家庭、地域が連携して、子供の情緒の安定や心理的な安全を担保

しながら、健康な生活を送らせる中で自己肯定感を高めることが急務でした。そこで小中共通の目標を「思いやりを持って自ら行動できる児童生徒の育成」と定め、それを受けて小学校は「自らを認め自らを信じる力の育成」、中学校は「心を磨く、体を磨く、知恵を磨く教育の推進」を重点として取り組んでいくこととしました。

協議会を実施する上で意識したことは大きく二つです。

一つ目は、協議会は地域の方の考え等を幅広くかつたつに協議してもらおう場とすることです。そのために、形にとらわれ過ぎることなく、フリーハンドで意見交換する場という認識を委員全員が共有することが重要だと考えました。幸い委員は既知の間柄であったこともあり、初回からブレインストーミング的な話し合いが実行できました。

二つ目は小中の意識連携です。校長同士は折に触れ様々な情報交換等を行っていますが、教職員間で日常的に同様の連携を行うことは困難です。しかし、地域全体で子供を育てるためには、児童生徒への認識、指導支援の意識を互いに共有しておくことが重要です。そのために、今年度は小中の教職員が一堂に会する場を意識し、児童生徒の発達段階や各校の現状を踏まえた意見交換を行っています。

今年度8月の学校運営協議会では、各校の取組について報告を行い、それを受けて自己肯定感の育成に向けた具体的な方法等を話し合いました。地域での挨拶や地域清掃、地域人材を活用した学力サポート、関係機関と連携した教育活動の継続等、幅広いテーマが話題となりました。

熟議の内容を具体化するためには教育計画への落とし込みが必要となるため、8月22日に小中教職員合同研修会を実施し、三つの部会で話し合いを持ちました。その結果、学力向上に関しては「小中接続型の漢字検定」「学びに向かう姿勢のスタンダード化」「地域人材を活用した学習支援」。生徒指導では「朝食を摂食しない子供への対応や別室の活用状況」の共有や「子供のための哲学p4c」「命の授業」の継続、特別活動では「小中合同あいさつ運動」「地域清掃」の継続、新規に「小学生の部活動見学」がそれぞれ提案されました。

菅澤校長

本校（北仙台小）はCS導入1年目として、立ち上げて良かったという成果を挙げたいと考え、熟議のテーマを吟味しました。あまり理想的で大きなテーマでは1年で実現するのは難しいと考え、児童の実態を共有した上で実現可能な課題を見付け出しました。児童の実態共有については、仙台市標準学力検査や体力・運動能力調査、昨年度の学校評価等を参考にしたほか、学校が課題と感じていることと掛け離れないようにするために、教職員のアンケートを基に話し合いました。その結果、本校児童の課題は体力の低下とともに、自己肯定感の低下であることが分かりました。そこで、今年度は自己肯定感を高める試みとして、保護者や地域の方に児童を見守ったり認めたりしていただく機会をより多く設定することとしました。

こうして学校運営協議会では、ゲストティーチャーとして指導いただいたり、ボランティアとして児童に寄り添ってもらったりする地域人材の活用を計画しました。第2回、第3回では、各学年のカリキュラムデザインを机上に広げ、地域の力をどの場面で生かすか話し合いました。委員の皆さんからは「町内会で花壇を整備しているが、詳しい人がいるので、学校の畑の先生になってもらえるのではないか。」「耕うん機はあるけど、年配者が畑を耕すのは大変だから、ダディーズ（お父さんの会）のメンバーに力を貸してもらえないか。」などとアイデアが次々に出ました。「1年生の防災教育では、女性防災リーダーをお願いすればいいのではないか。」「特別支援学級対象の理科の実験教室なら学校運営協議会の会長ができるのではないか。」など時間を超過しての話し合いとなりました。

協議会を実施する上で校長として私が大事にしていることは、学校運営協議会での話し合いが、教職員や児童が望んでいることと合致することです。つつい話が大きくなってしまって、あまりにも理想的過ぎたり、実現するために何年もかかったりするようなものになってしまうと、学校では「やってよかった。」という実感が湧かなくなるのではないかと考えたからです。そこで第2回、第3回で広がった話を



学年の先生に戻して、再度検討してもらいました。せっかくの地域人材も、学校側のニーズと合致しなければ教育効果は上がらないと考えたからです。本音を言えば教職員も参加しての熟議を行いたかったのですが、時間がとれず実現できませんでした。そこで熟議の話題に何度も上がった合奏団の運営や6学年の総合的な学習の時間に関することについて、部分的に合奏団の主担当や6学年主任に熟議に参加してもらい、現状やニーズを委員に直接伝える機会を設けました。

また、児童の実態を知ってもらう機会も必要と考えていましたが、これまで委員と児童との接点は、第2回の学校運営協議会で各クラス2～3分程度の授業参観だけでした。委員が児童と直接交流する機会が大切であると考え、第4回学校運営協議会では、「おしゃべり会」として2年生児童と委員が4、5人のグループになり、話し合う場を設定し、正解のないテーマについて自由に意見を出し合う時間をとりました。「学校で何をしてもいい日が1日だけあります。何をしますか。」といったテーマに対し、はじめは「皆のために……」ときれい事を言っていた子が、何を言っても認めてもらえると分かったと、「本当はぼく、殴り合いのけんかごっこをしたい。」などと本音を言うようになりました。「児童の変容する姿が面白かった。」であるとか、「今どきの子供はこんなことを考えているんだ。」という声が委員から聞かれました。子供たちは友達や大人である委員の方に自分の思いを聞いてもらえるのがとてもうれしそうでした。委員からは今どきの児童がどんな感性を持ち、何を考えているのか分かったと感想をいただきました。何よりおしゃべり会では委員と顔見知りになって、自分たちや学校のことを真剣に考えてサポートしてくれる大人が地域にいるのだと児童に認識させられたことが大きな収穫でした。12月には6年生と交流する機会を計画中です。

玉水校長

西山小では、令和2年度末に第1回目の学校運営協議会を持つに至りました。令和3年度に私が着任し、最初の協議会を行ったときに感じたのは、西山



の子供たちを学校と保護者、地域が協力して育てていこうとする雰囲気が既にできているところに私が参加したということでした。西山の子供たちが小中問わず自然に挨拶を交わすことができる姿からも、これまで共に歩み取り組んできた成果なのだと感じました。

本校の学校運営協議会は、「西山の子供たちの笑顔をつくるために」という大きなテーマを掲げ、CSに対する委員のイメージを共有するところから始めました。協議会全体として、学校教育目標及び学校経営方針に関する共通理解は確実になされているのですが、実際の話合いにおいては、委員それぞれの立場から西山の子供に働き掛けていることについて思いを述べる様子が多く見られました。校長として、協議会が主体的に活動できるようにするためには、蓮沼室長のお話にもあったように、やはり当事者意識を更に高め、委員同士が連携・協働していくことが重要であると感じました。

ただ、令和3年度は、本校における感染症拡大傾向の状況から、CSとしての具体的な活動を行うことができなくなってしまい、立ち上げから順調に進んできたところだっただけに、大変残念でした。

しかし、このようなコロナ禍の状況であっても、協議会の各委員が子供の現状や実態の変化を見たり聞いたり感じたりする機会がなければ、「どんな子供を育てたいか」等に対する実感を持っていないのではないかと考えました。これは、CSを推進していく上で大切にしたい共通の「思い」であり、「よりどころ」でもあるからです。そこで、各委員には、授業参観や運動会、学習発表会といった行事はもちろん、奉仕作業、各種ボランティア活動等にも可能な限り参加していただき、子供と共に活動し、接点を持てるようにしていきました。それらを通して得られた意見を集約し、協議会として自ら働き掛けられることをそれぞれ考え、話合いを行うようにしていきました。

本校では、協働型学校評価の重点目標として「進んであいさつしよう」「いろいろな本を読もう」の二つを掲げています。特に、挨拶に関しては、子供たちが概ねよくできているという評価結果を基にして、地域の防犯に関するテーマへと協議会の話合いが発展し、各町内会や保護者へ向けて委員それぞれ

が積極的に働き掛けていこうとする流れが生まれていきました。実際に不審者等の防犯情報が流れると、登下校時に明らかに今までよりも多くの保護者の皆さんが見守りを行う姿が見られるようになっていきました。また、読書に関しては、CS導入以前からボランティアによる読み聞かせ活動が盛んに行われていました。読書に対する子供の実態についても話を重ねていったことによって、ボランティアの人数も増え、食育とのコラボレーションや、土曜図書開放の取組の充実へとつながっていきました。

これらはCSとしての取組の新たな成果だとは言えないかもしれません。しかし、協議会の委員が子供の実態や現状について積極的に共通理解を図り、協議会が主体となってできることを働き掛けてきたことにより、これまで以上により多くの保護者、地域の方々へ広がっていくのだと感じました。このことは、校長として大変うれしく、今後のCSとしての展開が楽しみであり、大きな希望を感じています。

司会<多賀野>

では次に、二つ目の視点、CSを導入して課題と感じているところを、今後の展開についても含めてお話しいただきたいと思います。

2 「CS導入後の課題と 感じているところ」について

伊藤校長

CSの有効性を高めるための一番の問題点は、なぜCSを導入しなければいけないのか、という問いが校長先生方に多くあることと思います。法律だから、国に言われたから、教育委員会から言われたから、何年度までに設置しなくてはならないから、このような問いに各校長先生方一人一人が回答できれば、そして先生方、保護者、地域に共有できれば、有効性が高まると考えます。やらされるという意識ではなく、能動的な気持ちが大切なんだと思います。そのためにも校長としての教育理念、学校運営協議会を中心とした学校運営の姿が必要ではないかと思っています。

第2は、人選の問題です。偏りのない人選をして、本来の目的である幅広く地域住民が学校運営に参画

できるような仕組みにすることです。そのためには、基本的には地域の子供たちのことを優先的に考えて、多角的・多面的に意見を出せる人材を選定することです。任期が1年なので、中立性が保てない人選に関しては改選することになると思いますが、辞めていただく場合、納得して辞めていただけるのか、しこりが残らないか、後々トラブルにならないか心配です。

第3は、外に見える事実や問題に対しての意見が多くなるという点である。外部の方々は日頃、目にしている子供や教職員、学校の姿から提言されることが多いです。すると、挨拶や登下校の様子、たまたま来校したときに目にした職員の態度などの意見が大半になってしまいます。また、教育問題、いじめ・不登校、児童虐待、学力、不審者対策や非行問題、コロナ対策など教育問題に目が行きがちです。そのため出てくる意見が、必ずしも学校の実態と一致せず、ずれている場合も少なくありません。学校が期待しているのは、外に見える事実や世の中の教育問題ではなく、自校の日常の姿や生の子供の姿への言及なのです。

第4は、人事の件です。人事に対する意見を言うことができるが、人事に関してどのように扱ってほしいか、今後苦慮すると思います。

第5は、委員の研修です。蓮沼室長から今後の研修の見通しもお話しいただいたところですが、学校運営協議会の委員の方の研修も教育委員会にバックアップしていただいて、教員同様に研修を重ねていくのが大事なことかと思っています。

今後展開していきたい学校運営協議会の持ち方として、第1は、委員さん方に単なる外からの見える部分だけでなく、学校の日常についてPDCAサイクルで関わっていただき、評価していただくことです。具体的には学校が何をしようとしているのか、つまり計画(Plan)に対して意見をもらい、実践(Do)である授業や日常の子供や職員の姿を見ていただき、途中でも意見をいただく。そして評価(Check)していただき、改善(Act)に関する意見を提言していただくことです。

第2は、過度に理不尽な要求をしてくる保護者がいた場合に、CSの協議会委員さんの同意が得られないということを思慮して学校運営に生かしていき

たいと思います。

第3は、先ほど菅澤校長先生もおっしゃっていましたが、児童代表や教師と協議会委員さんとの熟議を行いたいと思います。

第4は、今は学校単独で学校運営協議会を立ち上げていますが、中学校区を一つにする意味でも、小中連携型の幸町中学校区では一中三小の組織を将来作っていただけたいと思います。そうすることで委員さんの重複もなくなると思います。

第5は、委員の中には、学校支援地域本部のスーパーバイザーがおります。協議会で決定したことを学校支援地域本部が学校と共に協働活動を行い、教育活動や授業、先生方を可能な範囲で支援していただいております。いわば、学校の「運営支援」を行うサポート機関です。この二つの組織が協力し、効率的に円滑に学校を支援することで、学校の教育を充実させ、仙台版CSの姿が実現し、「地域とともに歩む学校」という杜の都の学校教育の目標が達成されると思います。

最後に、私は、学校運営協議会というのは、学校が危機にひんしたり、非常に大きな課題が出てきたりしたときに、学校運営協議会が大きな力を発揮するのではないかと考えています。何かをやらうと力を入れて協議会を行うのではなく、教員が不祥事を起こして学校が信頼を失ったときや学校の合併問題がでたときに学校はこれからどうしていけばよいのだろうかというような問題が起こったときなどに力を発揮する組織ではないかと考えています。

高橋校長

令和3年度の学校運営協議会では、茂庭台の子供たちの強みや伸ばしたいことなどについて意見を交換しました。熟議は内容も濃く、今後の学校運営に反映させていくべき意見が多数出たのですが、教職員への伝達周知という課題が残りました。記録等を配りながら職員会議で、小学校・中学校それぞれで伝達はしましたが、熟議の熱量や委員の子供育成に掛ける意気込みまでを伝えることが十分にできたかは、反省が残ります。

そこで今年度は、4月の第1回運営協議会で委員、小中教員との合同研修を実施し、委員の思いや願いを共有することにしました。連合町内会長からは「茂

庭台の成り立ちと歩み」、続いて中学校さわやか相談員から「茂庭台の子供たち」というテーマで話をしてもらいました。その上で、小中学校の学校運営計画と重点努力事項等を確認したことにより、参加者全員が地域の子供に対する思いを共有することができ、教職員全員にも地域の方々の思いや願いが伝わる機会にもなりました。

また、昨年度の協議会で「コロナ禍のため学校での子供たちの様子を見る機会が減って残念」という意見が出されたことを受け、昨年度後半からは積極的に学校の教育活動を案内しながら、児童生徒の活動の様子を見てもらうこととしました。今年度も感染拡大防止に努めながら、授業参観や学校行事等を参観してもらっており、そのことが熟議の中で具体的な子供の姿を話し合う材料になっています。言い方は難しいのですが、イメージではなく実際の子供たちの様子を見てお話しいただくことがすごく大事だと感じています。

茂庭台地区では自己肯定感の向上に焦点化した様々な取組を進める中で、児童生徒の健やかな成長のために教職員、保護者、町内会、児童館・市民センター、児童養護施設等、地域の方々それぞれが同じ方向を向いて子供たちを支援していくことが具現化されつつあります。そのためのプラットフォームとして学校運営協議会が大きな役割を果たしていることから、今後も協議会の位置付けを大切にしながら学校経営に当たりたいと思います。

菅澤校長

コロナ感染症拡大防止のために、地域の方に学校に来ていただく機会や地域の行事がほとんど中止になっています。なので、一度切れてしまった地域との関わりを戻すことがCSの有効性を高めるために課題だと考えています。町内の行事や交流などの社会体験活動の機会が減少し、子供たちは人と接する機会が少なくなっている。親や先生以外の大人と知り合える機会はほとんどないのではないのでしょうか。地域で知らない人から知っている人へと児童を取り囲む大人の輪を広げ、寄り添ったり認め合ったりできる環境をつくる必要があると考えています。

今後展開していきたい学校運営協議会の持ち方等

については、学校運営協議会の委員やサポーターが学校で子供たちと日常的に触れ合えるようにしていきたいです。朝に読み聞かせ、休み時間に折り紙教室、放課後に校庭開放の見守りなど、様々な関わりができるとうれしいです。また、学校の抱える課題として不登校傾向の児童や個別の配慮が必要な児童の増加が挙げられ、支援が必要になっています。本校では教室以外にもそういった児童の居場所として別室を作り、児童支援教諭やさわやか相談員が主となって運営しています。しかし、そこに来る子供たちは個別の関わりを求めますので、個別の丁寧な対応が必要になります。一人で何人もの子供と関わるのはとても難しく、児童を見守る教職員が足りない状況です。昨年度からこういった体制をとっていて、母親から離れられずにいた子供や教室に入れず休みがちだった子が、別室登校から教室復帰へと改善したケースが複数見られています。信頼できる大人がいて、安心できる場所があれば、子供たちは少しずつでも自信を回復して、また自分から歩み出すことができることが立証できました。こういった好事例を継続したいところです。是非地域の方には地域の力を貸していただき、児童にとっても教職員にとっても安心できる学校を作り上げていきたいと思っています。

また地域には、子育てで悩む保護者も少なくありません。特にコロナ禍で関係性が希薄になって、地域で孤立している保護者もいます。転入してきて、そこから人間関係が広がらないという方もいらっしゃいます。学校だけが唯一の相談相手というケースもあるため、できれば保護者同士または保護者とシニア世代の方といった関わりを築き、お互いに協力して子供を育てる、地域の子を皆で育てるという仕組み作りにもいづれ着手していきたいと思えます。

玉水校長

CSの有効性を高めるために、今後大きな課題になるのは、コロナ禍に負けず人と人のつながりを作ることができるかどうかだと感じています。現状として、西山地区においても保護者同士が直接会話できる機会が以前より格段に減り、子供のことについて情報共有が不足しているとの声がよく聞かれます。

以前は盛んに行われていた子供会が、あまり動いていません。また本校では、教育相談ボランティア等積極的にボランティア活動に参加している保護者、地域の方々が多くいますが、その方々がやや固定化しつつある傾向も見られるからです。

これまで、CSに関する学校運営協議会での話合いの内容や具体的な取組の様子については、学校だよりやWeb配信等で伝え、理解を図るよう努めてきました。しかし、それだけでは学校と保護者、地域が目標・ビジョン等を共有し、双方向の関係性をより発展させていくのは難しいと感じています。

今後は、たとえコロナ禍の中であっても、直接的なコミュニケーションを大事にした学校運営協議会をできる限り継続して実施したいと思います。子供の考えや意見を聞いて、また多くの保護者や地域の方々の願いや思いを聞いて、教職員も含めた熟議を積み重ね、具体的な取組につなげていきたいと思えます。

ただ、現実的に本校には様々な家庭環境にあって配慮を要する子供がおり、日々学校に通うこと自体が難しい等の諸課題を有しています。協議会の各委員さんだけでなく、心ある地域の方々は、そのような子供に対しても、実際に声を掛け、共に見守り育てていこうとしています。そのような子供の保護者にも「地域の中で子供を育てる」ことができるという安心感が持てるような学校運営協議会の取組であると思っています。

さらに、今後CSとしての取組をどのように評価し、改善につなげていけばよいのか、ということも悩んでいるところです。CSとして取組の成果は、子供の成長過程で潜在的に蓄積され、すぐ明確には表れてはこないと感じるからです。ですから、学校運営協議会自体がより一層互いに「顔の見える」関係が大事になり、それを育もうとする意識を持ち続けなければならないのではないかと感じています。

西山の子供の挨拶がよくできると感じるのは、子供が地域の方々をよく分かっているからです。大人へと成長しても地域の一員としての意識を持ち続け、地域の活性化を図る力となるようなCSの取組にしていけたらよいと思っています。本校の学校運営協議会では、「西山の子供たちの笑顔をつくるためには、まず大人が笑顔でなくてはならない」という

思いもまた共有しています。校長として、西山の子供たちに教職員を始め多くの大人が関わり、子供と共に楽しく教育活動に参加できるようなCSをつくっていきたいと思います。

【総括】田辺会長

今日は、教育局学びの連携推進室 蓮沼秀行室長から、仙台市の施策について、CSを導入し、学校運営協議会の運営やその取組を実際に行っている4人の校長先生方から、課題も含めまして貴重なお話をいただきありがとうございました。2年前、私が学びの連携推進室で勤務していたとき、正に、この仙台版CSを全市に導入することを決めたときでした。まず一番苦労したところが導入期間です。CSの導入期間をどうするかということで厳しい議論をいたしました。学校支援地域本部事業のように、準備が整ったところから順次導入して長い期間を掛けるか、期限を定めて一気に全市に行き渡らせるかの二者択一でした。どちらも、それぞれに利点や課題はありました。最終的に、当時の教育長が3年間で全校導入することを決めてくださいました。確かに、時間を掛けて導入するより、市を挙げて導入する方が相乗効果を生み出す可能性があるのではないかと当時の教育長は思ったそうです。

公立の学校は、周りの学校の状況を見ながら活動を進める傾向がありますし、今後、管理職の大幅な異動を考えると当然だと思いました。逆に言うと、「周りみんな導入した」という状況であると、導入自体はあまり難しいことではないかもしれません。本当の問題は、導入・設置の後であると思っています。設置後、本来のねらいが達成され、地域と手を取り合って、子供たちの学びや育ちが豊かになるのかという内容や運営面が重要であると考えています。

ですから、今年度末で全ての市立学校・園にCSができてからが、本当の意味での地域との連携・協働が始まるのです。仙台市の場合は、地域から「CSをやってみよう」と出てきたものではなく、CS検討委員会の報告を基に、学校（校長）から声を出

し、これまで校長が研修してきたことを生かし、教育委員会の力も借りながら、導入・設置を進めています。

導入してからは、小さな力でも構わないので、学校からでも、地域住民からでも一歩ずつ始めて、互いに「一緒にやりましょう」と、みんなが参画していくことが大切だと思います。

ここからは、これからCSを導入し具体的に運用していく学校の参考となるために、今回4人の校長先生が話されたことからいくつかまとめてみたいと思います。

一つ目は、校長先生方が確固たる信念の下に学校運営の基本方針を打ち出すとともに、子供たちの実態や課題をしっかりと把握しているということです。「一緒にやりましょう」という言葉を発するためには、自校の実情を知り、何が特長で何を改善しなければならないかを校長がきちんと把握しておく必要があります。そこが、地域の方々と話すときの大前提になります。

地域の方々は、着任した校長はどんな人だろう、子供たちをどう育てたいのか、どんな学校にしたいのか、地域とどこまで関わってくれるだろうと関心を抱いています。校長の地域へ対する姿勢と学校経営への信念が大きな鍵を握っていると感じます。

二つ目は、蓮沼室長もおっしゃっていた学校づくりのパートナーを増やすことです。そして、併せてコーディネーターの役割をする方を置くことです。学校運営協議会委員の人数は、仙台市の場合、一協議会15人以内です。学校づくりを共に進めていく方々は、この人数だけではありません。委員を中心にして、そこから仲間を増やす工夫をみんなで考えることです。ましてや、仙台市では、これまで学校支援地域本部事業を推進し、学校の求めに応じた支援を行ってきました。つまり、学校からお願いされたからの行為が中心でした。しかし、CSは地域住民が主体性を持って学校づくりに参画する仕組みです。この受動から能動への意識の切り替えには、長い時間が掛かると予想しています。その意識を変えるのは、まずは校長であると思います。学校運営協議会委員への主体性意識の浸透が少しずつなされると、これまで受け身であった方々が、「やってみようか。」と少し前向きに能動的に変化すると思いま



す。そのときに、後ろから背中を押す役割がコーディネーターだと思います。仙台市の場合、コーディネーターが一番近い存在が、学校支援地域本部のスーパーバイザーや教育委員会から委嘱されている地域学校協働活動推進委員ではないでしょうか。この皆さんたちは、仙台市のCSを軌道に乗せるために必要な皆さんです。校長が先導し、CSを皆さんと連携・協働して運営しながら、徐々に地域住民主体のCSに移行していくことが、私の理想です。

三つ目は、共有と共感です。私たちは、コミュニティを形成していくとき、互いの意見を出し合い、その意見を尊重し、共有してよりよいものを作っていくという作業をしてきました。CSも同じで、立ち上げのときは、学校や地域で何度も顔を合わせて話をし、教員、保護者、地域の方々の子供たちの育ちについての情報を共有し、共感者を増やすことで、同じ方向を向くことができます。そして、そこから少しずつ共感の輪を広げていき、学校に関心を持ってもらうことが、時間は掛かりますが、CSを地域に広げていく一番の近道ではないかと思っています。その間に、私たち校長や教職員は異動し、学校のメンバーは替わりますが、共有・共感した地域の方々は、その輪を大きくし、代々引き継ぎ、「地域とともに歩む学校」がつくられていくものと期待しております。仙台市小学校長会としても、仙台版CSの発展に即した研修を深めてまいりたいと思います。

最後になりますが、令和5年度が、仙台市立学校・園のCS元年だと思っています。それぞれの地域で、子供たちの豊かな学びや健全な育ちは、学校だけでなく、地域とともに連携・協働することで成し得るものだという事を教職員が意識・認識したときに、仙台版CSは予想以上の広がりや内容の充実が期待されます。仙台には、その期待するにふさわしい取組と成果と、何より人材にあふれ、その伝統が受け継がれています。

「人がまちをつくり、まちが人を育む学びの循環のもと、たくましく、しなやかに自立する人を育てる」仙台市教育構想2021の基本理念は、正に仙台版CSの目指すところだと思っています。本日は、ありがとうございました。

【まとめ】蓮沼室長

各校での取組のお話は大変参考になりました。仙台版CSの取組で、学校づくりや学校課題の改善に向けた実践が進んでいることを、心強く感じております。

話題提供では、伊藤校長からは協議会への期待が「外に見える問題ではなく、学校の日常的な姿や子供の姿への言及」であるということや、菅澤校長からは「学校運営協議会の話合いが教職員、児童が望むことと合致することに留意している」といったことは、学校運営協議会が目をつけるテーマの方向性として非常に重要な点であると考えます。

また、高橋校長の「小中合同の学校運営協議会が児童生徒の健やかな成長を支援するためのプラットフォームになること」、玉水校長からは「西山の子供たちの笑顔をつくるためには、まず大人が笑顔でなくてはならないという思いを共有し、多くの大人が子供と共に楽しく活動に参画できるCS」といったことは、学校で目指すCSについて明確な姿をお示しいただきました。このような目指す姿を学校・保護者・地域で共有していくことが不可欠なことと思います。

座談会の最後に私からは、黎明期にある仙台版CSで共通に取り組んでいただきたいことについて三点お話しいたします。

各校の話題提供では、協議会委員の学校理解を深めていただくために、子供たちや教職員と関わる機会を設定して、学校運営協議会での協議が、子供や学校の実情を踏まえ行われるように進めている話がありました。一点目は学校運営協議会委員の方々の子供への認識が様々であることから、学校理解や子供の実態把握の機会を十分に設定していただくことです。このことが学校運営協議会の協議の前提となります。協議会委員の方々には、過去の経験により学校や子供たちへの理解度も異なります。この点を心に留めて、プロセスを踏んでいただければと思います。学校に足を運んでいただくことで学校との心理的な距離が近づくことにつながります。加えて、できるだけ多くの生の声を伝えるため教職員や児童生徒も積極的に関わっていくことがCSを有効に機能するためプラスに働きます。また、協議会委員からの申し出に応えるなど、柔軟な対応もお願いいたし

ます。

二点目は、協議会委員の当事者意識の形成に関して、全ての協議会委員に、CSの「スピーカー」と「アンテナ」になっていただくことです。「地域絡ぐるみでの子供を育む」意識の浸透は、CSの取組が一部に留まっていたのでは進みません。協議会が閉じた組織となることを防ぎ、地域にその取組の浸透を図るために、協議会委員がそれぞれのバックグラウンドとなる組織や団体、活動の場で、CSのことをできるだけ多くの方々に伝え、理解していただくために「スピーカー」になっていただきます。さらに、「スピーカー」の発信に対する声、取組への意見を拾い、学校運営協議会や学校へフィードバックするのが、「アンテナ」です。「スピーカー」として動いていただいたことの報告や、「アンテナ」として集めていただいた情報を踏まえた協議は、学校運営協議会の活動に地域・家庭の声を反映させることにもつながります。玉水校長から、協働型学校評価での協議について、協議会委員が地域に伝えたことで、取組に関わる方々に広がりが見られたと言うお話もありました。このような手応えを、CSでの小さな成功体験として積み重ねていただければと思います。

三点目は、伊藤校長がお話しされたことと関連しますが、「学校支援地域本部との連携・協働」に関してです。仙台版CSの導入を機に、改めて学校支援地域本部の体制を点検し、「地域につくられた学校の応援団」として機能させていく必要があります。学びの連携推進室としては、なお一層の学校支援地域本部に対する市民の理解、スーパーバイザー（以下SV）の資質向上といった取組に努めてまいりますが、併せて、各校の学校運営協議会で学校支援地

域本部の体制整備や学校支援の内容を協議し、学校支援地域本部が円滑に機能できるように体制の確認をお願いいたします。SVの役割は、学校と地域をつなぐ橋渡し役です。校長・教頭との情報共有や相談、教職員、地域諸団体やPTAとの関係、市教委との連絡・調整といった役割を担うためには、学校の理解とフォローが前提となります。管理職が率先し、SVが気軽に相談できるような良好な関係づくりを進めていただくようお願いいたします。以上三点の確実な実践をお願いいたします。

さて、学校教育の転換期での対応や子供に関する様々な課題への対応、教育の質の担保とワークライフバランスを両立する働き方改革など、学校に大きな負荷が掛かっている中で、様々な課題に対し、学校のみで対じし克服していくことは、もはや不可能です。

また、コロナ禍により、学校・地域・保護者が対面し関係性を深める機会が持ちにくくなりました。特に保護者と先生方との意思の疎通の機会が不足し、信頼関係を基盤にした保護者と先生の子供をめぐる関係が崩れていないか不安を感じます。

こういった状況で仙台版CSを導入している意味は、子供や学校をめぐる課題の改善を図りつつ、これからの時代に応じた学校づくりを実現するためです。そして、その肝となるのは、対話と協働による学校・地域・家庭三者の信頼関係の再構築です。

仙台版CSの導入により、学校づくりに新しい風と力呼び込み「学校だけで頑張ることから卒業」を果たすこと、また、「地域とともに歩む学校づくり」の実現に引き続き御尽力いただきますことに御期待申し上げます。



提
言今日の課題に対応した
創意ある教育

明日も来たくなる楽校を目指して

第1地区会長 小野 雄一（向山小学校）

これは、向山小が、教育目標達成に向き合うために昨年度から掲げているスローガンです。

教師の授業づくりはもとより、子供たちが、児童会活動について考える際に「誰もが楽しめる○○…」という提案がされるなど、2年を掛けて浸透し、教育活動を検討する上で意識されるようになりました。

誰もが、楽しいことはやめたくない、もっと続けたいと思うものです。つまり、日々の学校生活が楽しければ、「明日も学校に来る」という子供たちのモチベーションの向上に役立つはずです。

では、学校生活の楽しさとは何でしょうか。それは、「学び」の楽しさだと考えます。そもそも学校は学ぶところであり、子供たちの気付きや発見を待つ「学び」の種が多々あります。教科書を使う「学び」であれば、分かる・できる、という達成感や満足感が楽しさに結び付きます。また、先生や友達、地域の方など様々な人々との交流は、体験を通じて多様な「学び」の楽しさを提供してくれます。今後は、コミュニティ・スクールの取組を通じて、より力強い支援が得られると期待しています。

教師が、「よく分かる授業」を追求することは、

学習指導要領にうたわれる「育みたい資質・能力」の三つの柱「学んだことを人生や社会に生かそうとする、学びに向かう力、人間性…」、「実際の社会生活で生きて働く知識及び技能」、「未知の状況にも対応できる思考力、判断力、表現力」をバランス良く育むことにしっかりと結び付くはずです。

つまり「馬を水辺に連れて行くことはできるが水を飲ませることはできない」といういにしえのことわざが示すとおり、子供たちをその気にさせることが大切です。急激に変化する時代を生きる子供たちに、学ぶ楽しさの経験を通じて、自ら進んで「学び」に向き合う姿勢を育むことが、子供たちの将来に向けた「生きる力」を育むことに直結するのだと考えます。

そして何より、教師にとっても学校が「明日も来たいところ」でなければなりません。一人一人の教師が、より良い授業づくりの工夫や子供との触れ合いに没頭できる環境を整えることこそが、校長に課せられた大切な役割なのだと改めて思います。

さあ校長も、誰もが「明日も来たくなる学校」を目指して、共に学び、楽しんでまいりましょう。

提
言今日の課題に対応した
創意ある教育

現有戦力を大切に

第3地区会長 森 直（寺岡小学校）

「学校は、現有戦力で戦っていくしかないのだ」教務主任時代、職員の病休や年休等が重なり、補欠計画がままならないと校長室で思わずぼやいてしまった際、当時の校長が私に静かにおっしゃった言葉である。ないものねだりをしては仕方がない、ましてや同僚への不満とも取れる発言が職員の耳に入ったときの影響を考えると、あのときいさめていただき本当に感謝している。その日から、この言葉が私の学校経営の指針となり、現有戦力のチーム力向上を目指してきた。

たまたま縁あって同じ職場に勤めることになった職員集団である。意欲や力量など個人差が大きく、一人一人の思いや願いも違っている。さらに職員数に余裕は全くない状況である。そのような集団を組織としてバランスがとれ、同じ方向を向いて進んでいくチームにまとめ上げていくことが校長の大きな責務である。それぞれが持てる力量を十分に発揮でき、できればプラスαが加わるように指導支援、称賛をしていく。そうすることで予測困難なこの時代

でも十分戦えるチームとなっていくのである。

毎年、子供たちに育てたい資質・能力を明確にし、教職員と進む方向を共有すること。力量や特性を見極め、適切な人材配置をすること。認め励ましながら人材育成をすることを地道に繰り返してきた。

また、毎日のブログで、子供たちが育っている姿と同時に教職員の頑張りも紹介してきた。特にコロナ禍やGIGAスクール構想等今日の課題に対して教職員が子供たちのために工夫したことや家庭や地域の協力に対する感謝の意を広く周知することで、教職員の士気が高まり、家庭や地域が学校に協力的になるなどプラスの循環が見られるようになった。

Chromebookの使い方をふだんはおとなしい若手教員がベテラン教員に伝授している様子や3年ぶりの行事の再開に向けて新たな視点で議論を活性化させている様子を見ると課題山積の今だからこそ、チーム力を向上させるチャンスでもあると感じている。

今後も現有戦力を大切に育てながら、予測困難なこの時代を子供たちのために戦っていきたい。

提
言今日的課題に対応した
創意ある教育

「仲間」と共に「地域」と共に

第5地区会長 須藤 洋（原町小学校）

原町小学校区には、「柿の木応援団」と呼ばれる学校支援地域本部を中心に、様々な教育活動を応援してくれる地域の方々がたくさんいる。

また本校では、『仲間』と共に『地域』と共に」を合言葉に、教職員と子供たちで①周囲のために役に立つことを考える機会、②役に立つことを実行する機会を大切に教育活動を展開している。

今年度は、三年ぶりに商工会主催の「原町本通り七夕まつり」が開催された。高学年の児童が、日頃の恩返しの気持ちを込め、オリジナルの七夕塗り絵をデザインした。そして、全校児童で塗り絵づくりに取り組み、商店街に飾っていただいた。

5年生は、この秋に、原町商店街の方々と一緒に本通りの花壇に花を植える活動に取り組み、そのときに植えたパンジーの花は、今も地域の人たちの目を楽しませている。

昨年は6年生が、今年は4年生が、市民センターの方々と連携して、ペットボトルイルミネーション作りに取り組み、クリスマスの時期に駅前を通る地

域の人たちの目を楽しませている。

先日、6年生が総合のまとめの発表で、地域のために自分たちができる恩返しはないかと考えたプランを地域の方々に聞いていただく機会があった。

その中に、原町本通りには以前よりもシャッターを閉めている店が多くなり寂しくなっているの、明るい絵やイラストを描くことで、本通りを通る人々を明るく元気にしたいという発表があった。聞いてくださった地域の方々は大いに喜んでくださり、実現に向けて温かいアドバイスをくださった。

学校を支えてくださる温かい方々のサポートをたくさん受けて成長している子供たち。

子供たちの思いやアイデアを喜んで支援して下さる方々がたくさんいる原町小学校区は大変ありがたい、すてきな地域だと思う。

これからも「仲間」と共に「地域」と共に歩いていく教育活動を粘り強く展開し続け、明るく元気な「原町コミュニティ」を築き上げていくことに挑んでいきたい。

提
言今日的課題に対応した
創意ある教育

子供たちに挑戦する喜びを

第7地区会長 浅野 裕一（長町小学校）

子供たちの自己肯定感の低下は大きな課題である。校長として「目標に向かって挑戦することは、努力する気持ちを高め、行動を変え、達成する喜びを与えてくれる」と機会を捉えて話してきたが、言葉だけで改善するものでもない。

先日、「競争力低下 教育に起因」という新聞記事を目にした。「最近の若者は一見素直で協調性があるが、その実は競争や挑戦が嫌いで受け身になりがち。その原因の一つは、競争を緩和し、その代わりに主体性と協調性両方を育もうとした近年の教育にある。」というのだ。順位を決めない徒競走や賞の優劣を付けない展覧会、主役のいない学芸会など心当たりがないわけではない。私たちが違和感を感じながらも行ってきた教育活動の中に、その一因があるのではという指摘に心が揺れる思いがした。

記事には更に「大人の方が、『挑戦が成長につながる』と実感できていないのに、無責任に挑戦を押しつけている。大人自らが挑戦する姿を見せて欲しい。」とも書かれていた。子供たちに求めるか

らには、大人が挑戦する喜びを体現して見せなければならぬという指摘である。

コロナ禍の中、これまでの日常を奪われ我慢しなければならないことが多かった子供たちにとっては、毎日が新たな挑戦の日々であったはずだ。それは共に過ごした私たち教職員にとっても同様である。子供たちと乗り越えてきたこの3年間の挑戦を自信に、そして今後も続くかもしれない数年間も、私たちは子供たちの頑張りを認め称賛するとともに、決してコロナ禍のために足踏みをする事なく、大人も諦めずに挑戦し続ける姿を見せてほしい。

子供の自己肯定感を高めるには、自信を持つこと、自分を好きになること、そして自身を認め、他者からも認められることが必要である。そのために校長は、これからの学校現場を担う若い教員たちのエネルギーを生かしながら、子供と共に、教職員と共に、そして保護者、地域と共に、大人が挑戦する姿を体現してほしい。そして前向きで力強い学校経営を進めてほしいと願っている。

学区紹介 地域とともに

地域の協力をいただきながら

宮崎 善功 (中山小学校)

中山小学校は、昭和43年に仙台市の43番目の学校として開校した。当時「中山ニュータウン」として大規模な開発が始まった頃に開校したため、児童数はあっという間に増え、最大1777名(昭和53年度)にまで増加した。ここ数年は、その三分の一程度の児童数で推移している。

学区内には、1kmほどの坂道の両側にたくさんの商店が並ぶ「中山商店街」がある。飲食店や文房具店、ドラッグストアからスーパーまで多彩だ。商店街振興組合の活動は盛んで、月に一度開かれる「街道市」は地元や近隣の住民でにぎわう。10月には2年ぶりに「大街道市」が開催された。また、ホームページも開設しており、商店街のことはもちろん、中山地区のあらゆる情報が掲載されている。

学校と商店街のつながりも深い。商店街の探検はもちろんであるが、振興組合の役員をゲストに招き、中山地区について学ぶ学習も行ってる。つい先

日、振興組合の方や地域住民を招待して、中山地区発展のための提言を行う授業も行った。「子供たちの感覚は、なかなか面白い」と、提言をまとめたシートを提供を求められたほどであった。今後も、商店街の発展を願うとともに、より良い中山小学校との関係を構築していきたい。

校舎建て替えのため、中山小学校の児童は、現在仮設校舎で生活をしている。仮設校舎から徐々に解体されていく旧校舎の姿を見るのは、複雑な心境である。7000名近くの児童が学んだ校舎である。何十年かに一度の校舎建て替えの機会に何かできないかと考え、民間企業の力を借りて「校舎思い出プロジェクト」を2日間にわたり実施した。お世話になった校舎に文字や絵を描き、それらを写真に収めてアルバムをつくるという取組である。高学年を中心に原案を考え、縦割りの組織を使って校舎内壁面に文字や絵を描いた。PTAの協力をいただきながら、保護者の参観も同時に実施し、大いに盛り上がったイベントであった。

新校舎は令和7年に完成予定である。新しい校舎の完成を楽しみに、日々の取組に当たってきたい。

学区紹介 地域とともに

将監の歴史とともに

柳生 博之 (将監中央小学校)

仙台藩士・横澤吉久(通称：将監)が根白石の新堰から水を引いて造った将監堤(沼)が、「将監団地」の名の由来だそうです。その将監沼の周辺は、風致公園として自然が保全され、かつての里山の面影が色濃く残っています。また、春の季節には、道路沿いのサクラの花で美しく彩られます。

昭和40年代に開発された将監団地は、県営住宅や公設小売市場が作られるなど発展し、居住者が増え続けました。昭和46年に将監小学校、昭和50年に将監西小学校が開校しましたが、両校の急激な児童数増加を受け、将監小、将監西小、将監中のPTAは「3校連絡協議会」を結成し、「将監第三小学校」と「泉ヶ丘小学校」の新設を求める運動を展開しました。その運動は当時の泉市教育委員会を動かし、新たな小学校の建設が決定しました。しかし、将監団地には新たな小学校の建設用地はなく、公団所有地を譲り受け、その用地に将監中学校を移転・建設、

そしてそれまで使用していた中学校を小学校として転用することになり、本校は昭和54年に泉市立将監中央小学校として開校しました。

開校から40年が過ぎ、児童数も大きく変化し、近隣校の中では最も児童数の多い学校になりました。

「中学校サイズ」の広々とした校舎、校庭、体育館は本校の自慢の一つです。令和3年9月から始まった大規模改修工事も令和5年1月までに完了し、きれいになった校舎や体育館で、子供たちは伸び伸びと学習や運動に励んでいます。

令和4年7月には、体育振興会主催の「将監中央学区体振まつり」が3年ぶりに開催されました。令和元年度までは本校体育館で開催されていましたが、今回は令和4年5月に複合施設として新しくなった将監市民センターの多目的ホールで行われ、100名を超える将監中央の学区民の皆さんがビーンボウリングやボールダーツ、輪投げなどの競技を楽しみました。

新型コロナウイルスが依然、猛威を振るっていますが、今後も地域との結び付きを大切にしながら学校経営に当たってまいりたいと思います。

研究部から

研究部の活動を振り返って

研究部長 菅原 弘一（錦ヶ丘小学校）

1 はじめに

新型コロナウイルス感染症への対応が続く中ではあるが、様々な場面で「3年ぶり」に参集、対面での行事が行われた令和4年度であった。研究部にとって最大のイベントである東北連合小学校長会研究協議会岩手大会も3年ぶりに現地に参集し、2日間の大会が開催された。全国連合小学校長会島根大会は、残念ながらオンライン開催となったものの、指定都市問題研究協議会新潟大会は、参加人数を絞っての現地開催で行われた。大会終了後には、参加者が口々に参集、対面協議の良さを語った。

定例の研究部会は、教育センターに参集し、オンラインも活用して感染拡大防止に配慮しながら実施するスタイルが定着してきた。委員会ごとに臨時会を開催して研究を深めるなど研究活動が活発に行われた。研究部のGoogleクラスルームを活用して資料を共有するなど研究活動においても、クラウドの活用が進んできたのがこの間の変化だと言える。

宮城県の研修部との間で年2回開催してきた県市研修部連絡協議会は、9月のみ開催できた。初めて参加するという方がほとんどで、これまで当たり前のようになってきた恒例の会議等の開催趣旨を改めて確認していくことの必要性を感じた。なお、第44回宮城県小学校長会研究協議会北部大会も開催され、仙台市からも参加し、協議に加わった。以下に、仙台市としての具体的な活動の様子を紹介する。

2 東北連合小学校長会研究協議会岩手大会

令和4年7月7日、8日の2日間、岩手県盛岡市を会場に、東北連合小学校長会研究協議会岩手大会が開催された。大会主題を「自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る日本人の育成を目指す小学校教育の推進」と設定、副題を「郷土を愛し 主体的・協働的に学び 夢と未来を拓く子どもを育てる学校経営の推進」とした。2日間の大会を通して、校長の果たすべき役割と指導性について考えを深めることができた。

初日、全体会のシンポジウムは、テーマを「震災

からの復興～子どもたちに夢と希望を～」と設定し、岩手県校長会研究部長の吉田久美子校長をコーディネーターとして、テレビ岩手東京支社の廣嶼文樹氏、8Kurasuの菊池のどか氏、岩手県立図書館の藤岡宏章氏の3氏をシンポジストに迎えて行われた。特に、釜石東中学校に在籍中に被災し、26歳となった現在では防災教育に携わる菊池のどか氏の姿から、学校教育が果たす役割の大きさや若い力の可能性を感じることができ、震災から11年あまりの時の流れを改めて感じながら、明日への希望を抱く時間となった。

2日目の分科会（研究協議）では、第5分科会（健やかな体）視点1「心身の健やかな成長を目指す教育課程の編成・実施・評価・改善」において、栢江小学校の毛利雄一校長が、「未来に夢を描き、健やかに生きる児童を育てる健康教育～「仙台市健やかな体の育成プラン」の推進をとおして～」の発表を行った。

「仙台市健やかな体の育成プラン」が目指す、児童像の実現に向けて成果を上げている実践事例校（学校体育：仙台市立芦口小学校、保健体育：仙台市立八木山南小学校、食育：仙台市立川前小学校）の取組について説明し、グループ協議によって、健康教育推進のために校長が果たすべき役割や指導性について協議を深めた。

なお、大会終了後は、令和6年度の東北連合小学校校長会研究協議会青森大会において仙台市が担当する領域（教育課程 知性・創造性）についての検討も開始した。

3 指定都市小学校長会研究協議会新潟大会

令和4年11月10日、11日の2日間に渡って第76回指定都市小学校長会研究協議会新潟大会が、現地参集型で開催された。大会テーマを「新たな未来を構想し、ポストコロナ時代の教育を創出する学校経営の推進」とし、東京都及び20の指定都市校長会から参加者がANAクラウンプラザホテル新潟に参集し、研究協議を深めた。

初日の前半は、6分散会に分かれて研究協議を

行った。研究協議は、第1分散会「学校経営上の諸問題」、第2分散会「教育課程編成上の諸問題」、第3分散会「人権教育上の諸問題」、第4分散会「特別支援教育上の諸問題」、第5分散会「生徒指導上の諸問題」、第6分散会「学校・家庭・地域連携上の諸問題」であった。仙台市は、第5分散会「生徒指導上の諸問題」において、北六番丁小学校の麻生信行校長が「不登校支援における組織的対応の推進と校長のリーダーシップ」と題した発表を行った。アンケート調査の分析結果を紹介し、新田小学校における「組織的な早期対応の工夫」と国見小学校における「別室対応を核とした受け入れ体制の工夫」を具体的な事例として示しつつ、校長のリーダーシップの大切さや、それを支える地区校長会での情報交換の有用性についても伝えることができた。

初日の後半には、話題別情報交換会が開催された。第1部会「働き方改革」、第2部会「多様性・共生社会」、第3部会「人材育成」、第4部会「ICT活用」、第5部会「コロナ後の教育課程」、第6部会「コミュニティ・スクール」の6部会に分かれて、グループ内での発表と情報交換が行われた。研究協議、情報交換共に充実した時間を過ごすことができた。

なお、終了後には、交流会（伝統芸能鑑賞会）が開催され、新潟万代太鼓や古町芸妓の舞踊が披露され、旅情も味わいながら、交流を深めることができた。

2日目には、全体研究会として教育講演が行われた。「事業家として教育を考える」を演題とした、ディー・エヌ・エー代表取締役会長 南場智子氏の講話を拝聴した。

閉会式では、大会宣言文が採択され、次期開催都市である浜松市の挨拶で締めくくられた。大会終了後には、アーカイブ配信も行われ、現地参加できなかった会員も、大会の様子を知ることができるようになるなど、オンラインの活用範囲の広がりも感じることができる大会となった。

4 仙台市小学校長会研究協議会

学校課題委員会では、令和4年11月15日に、仙台市教育センターに参集し、研究協議会を実施した。2年次の取組となる研究主題「地域とともに歩む学校づくり推進における学校運営協議会制度と校長の在り方～仙台版コミュニティ・スクールの充実を目指した導入期における学校運営 2年次～」の下、調

査結果の報告や事例校の実践紹介、そして、グループごとに決めたテーマについての研究協議を行った。

鎌田副会長による開会の挨拶に続き、7月に実施したコミュニティ・スクールに関する調査の結果について説明を行った。その後、担当委員が、令和2年度にコミュニティ・スクールを導入した2校の取組について、スライドを使って紹介した。小学校単独で導入した国見小学校と、生出中学校と連携して導入した生出小学校の2校である。導入の経緯や学校運営協議会の在り方、熟議の実際などの視点で、両校の取組の成果を共有し、多くの学びを得ることができた。

その後に行った研究協議は、生出小学校の石垣恵校長のコーディネートにより、「熟議」の体験も兼ねながら、14グループに分かれて実施した。コミュニティ・スクール導入後の課題や成果について付箋を使って交流した後、グループごとに決めたテーマについて話し合った。振り返りの際に書いた付箋には、「いろんな考え方、進め方を聞くことができた」「焦らず、ゆっくり進めていきたい」「今後、何をすべきか整理できた」「地域に合った形を見つけていきたい」などの記述が見られた。十分な時間を確保し、様々な段階にある学校が意見交換することにより、自校の取組を見詰め直す機会にすることができた。

閉会の挨拶で原副会長から、今回の研究協議会で話し合われたことなどを参考にしながら、自校の実情に合ったコミュニティ・スクールにしていきたい、という話をいただき、令和4年度の研究協議会を終えた。

5 今後の研究推進に向けて

「予測困難」な時代にあって様々な課題に直面し、校長のリーダーシップの在り方が問われていることを実感する毎日である。課題と向き合い、校長としての力量の向上に向け、校長同士が共に学び続けることがますます重要になる。次年度以降は、行政区制への移行などもあり、研究の在り方自体の見直しも必要になってくるであろう。どんな時でも、新しい時代を見据えながら学ぶ姿勢を大切に、創意工夫を凝らして力強く研究を推進していきたい。

生徒指導部から

生徒指導における今日的課題に対する取組

～令和4年度活動報告～

生徒指導部長 齋藤 晴彦 (将監小学校)

1 今年度の活動にあたって

生徒指導部においては例年、校長会の活動の重点として掲げられている「命と心を守り育む教育の推進」を受けて、「児童の健全育成等、今日的課題に対し、その指導と対策の充実を図り、校長の学校経営及び各校における生徒指導実践の一助に資する」を方針に掲げ、「調査研究」「関係機関との連携」「研修」「復興七夕」を四本柱として活動に取り組んでいる。

今年度も、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、一部活動が制限を受けることとなったが、今日的課題に対しての取組を進めるため、活動の主眼である調査研究に加え、新たに「学校間連携」という視点での研修活動に取り組んできた。

2 活動の概要について

(1) 調査研究の推進

令和元年度より、現在の学校教育における喫緊の課題である不登校問題をテーマとし、「不登校対策に取り組む学校経営」を研究主題にして調査研究に取り組んできた。3年間の研究で、アンケート調査等を実施することにより、不登校対策の概要や課題について把握し、各校の状況や具体的な取組、工夫や改善によって効果が見られた事例等についての情報を共有することができた。

また、今年度11月に開催された指定都市新潟大会における発表でも、調査研究で得られたデータを生かすことができた。

今年度は、新研究主題による研究の初年度となるが、これまでの研究結果を受け、不登校対策の具体に焦点を当てることで更に研究を深めるため、「不登校児童に対する支援の実践」というテーマで調査研究を行うことになった。調査の目的を「不登校の問題を抱える児童に対してどのような支援を行っているか、具体的な事例を調査し、今後の校長としての取組に資する」とし、不登校児童への支援策として、校内で効果的であった取組や外部機関との連携などに関する事例について、アンケート調査を行った。

調査研究の詳細は、仙台市小学校長会発行の「研究紀要」を御覧いただきたい。

(2) 学校間連携

今年度、新たな取組として、学区内に児童養護施設が所在する小学校(8校)を対象校として、校長会生徒指導部の下部組織に位置付ける「児童養護施設等に係る学校連絡協議会」を立ち上げた。この協議会は、児童養護施設等との連携体制などを整備し、各学校の情報交換や社会的要請から派生する諸課題への対応を協議することを目的として設置したものである。設置の背景には、①児童の社会的養護における「家庭的養護と個別化」は最重要課題と位置付けられており、各児童養護施設が小規模施設を拡充・加増するなどの対応を行うことに伴い、学区内に施設を持つ学校も増加してきたこと、②「子ども基本法」が令和5年4月1日に施行されることから、児童の権利擁護等に対して学校にも一層高い意識が求められていることの二点がある。活動内容として、年2回の定例会を開催し、市児童相談所行政教員等を招へいしての研修会や情報交換等を行い、緊急的に協議等が必要となった場合には臨時会を開催することとした。今年度は立ち上げの初年度のため、11月に第1回目を開催し、児童の処遇や権利擁護についての研修及び諸課題に関する意見交換を行った。

(3) 関係機関との連携等について

「青少年対策6機関・小中生徒指導部合同会議」及び「小中合同研修」、「復興七夕(オープニングセレモニー参加)」は今年度も中止となった。関係機関との連絡・連携の希薄化が懸念されるところであるが、七夕まつり開催に向けての会議をオンラインで実施するなどの新たな取組も行われている。

3 次年度に向けて

コロナ禍によって停滞している関係機関との連携について、開催方法も含めて再開に向けた取組を進めていく。また、今年度立ち上げた「児童養護施設等に係る学校連絡協議会」について、今後は中学校長会生徒指導部との連携も検討していく。

平成22年に作成された「生徒指導提要」が今年度改訂されたことを受け、時代の変化に即した生徒指導の在り方を探っていく必要がある。

新任校長所感

学校経営に寄せる思い



しげれ くすの木 たくましく

大久 耕 (古城小学校)

校地にたくさんの樹木が茂り、「古城の森」と呼ばれる中に、「トトロの木」と名付けられた校木の「くすの木」が泰然自若とした様を見せています。50年近い年月を経て、校歌にある「しげれ くすの木 たくましく」とおり枝葉を広げ、その木陰は、子供たちや地域の人々が集う場所となり、たくさんの笑顔にあふれ、時には癒やしや励ましも与えています。校長として着任して以来、この「トトロの木」に子供たちの成長を願い、また自身の学校経営を振り返る毎日です。

職務に当たっては、凡事徹底を心掛けています。毎朝の校門での挨拶、児童、職員への声掛け、書類の確認など、小さなこともおろそかにしないことを自らに課しています。次に、コロナ禍でもあり、状況の変化への対応や決断、実行が求められる中、これまで「勇気を持って前に進もう(勇往邁進)」と、自らが関わった子供たちに伝えてきた言葉を自らに向けて発し、迷いと向き合っています。

今後とも、多くの方々の力を借りながら、着実に、慎重に、しかし大胆に学校づくりに取り組んでまいりたいと思います。

熟議

板橋 宏明 (川平小学校)

川平小学校でも、コミュニティ・スクールがスタートしました。第3回で初めて「熟議」を行ってみま

した。テーマは目指す子供像を実現するためにできることと、防災に関することにしました。

リーフレットにあるような熟議になるのか不安でした。委員は学校に協力的なすばらしい方々ですが、それぞれの役割に応じた解決策が示されるまで話し合いが深まるのだろうか心配だったのです。しかし、その心配は杞憂でした。小グループによる討議を始めたたん、熱い議論が交わされました。自分に何ができるのか、建設的な意見が次々に飛び出したのです。皆様の学校に寄せる熱い思いを肌で感じる事ができました。熟議を通して地域・家庭と手を携えて取り組む手立てが示され、協働して取り組む方向が見えてきたと手応えを感じています。

本校協働型学校評価重点目標の「自分や相手のよさを認められる子供を育てる」の実現に向けて、今後一層地域の皆様のお力をお借りしながら、学校経営に努めていきたいと考えています。

合い言葉は「ともにチャレンジ!」

福田 理枝 (人来田小学校)

人来田小学校の合い言葉は「ともにチャレンジ」です。子供たちのために何ができるか思考する教職員、制限がある中でも懸命に学習や行事に取り組む子供たち。校長としてできることは何なのか、何にチャレンジすればいいのか、思い悩む日々でした。

転機となったのは研修で講師の方が話された「子供たちの事実から学校づくりを」という言葉です。

子供たちをよく見ること、教職員と子供について対話すること、保護者や地域をもっと知ることから

始めよう！…ようやく一步を踏み出せたのでした。子供たちの笑顔から何を求めているのかを感じ、困っている姿から何ができるかを考えました。教職員は積極的な教育活動を提案し、保護者や地域の方々からは期待や励ましの声が届きます。子供たちの事実には学校経営のヒントがあり、やっぱり学校ってすばらしい、と改めて確信することができました。

これからも保護者の皆様、地域の方々、そして教職員と共に、子供たちが「明日も楽しみ！」と思える学校づくりに努めていきたいと思えます。

「生き生き」

大友 英之 (沖野東小学校)

私はよく休み時間、校庭を眺めています。たくさんの子が校庭に出て、実に楽しそうに遊んでいます。本当に「生き生き」としていて、見ているだけで私もうれしくなってしまいます。休み時間だけでなく、授業中も子供たちはその子なりに一生懸命に学んでいます。子供たちを「生き生き」とさせている要因の一つは、周りの大人が活力にあふれ「生き生き」としているからだと考えています。直接子供に指導する教員や学校職員、子供たちのために何かできないかと模索するPTA、何かあれば駆け付けて力を貸してくださる地域の方、本校には「生き生き」とした大人も多いことに気付かされます。「おらほの学校」として地域に愛され積み重ねられてきた取組で、今があるのであり、先人にも感謝の念が絶えません。

新任校長として、せめて日々「生き生き」と過ごそうと思っています。それが、少しでも子供たちや教職員の活力のもとになってくれればと思っています。自分を鼓舞して今日も頑張ります。

日々努力

坪井 和子 (秋保小学校)

4月1日。秋保小に着任した日の緊張と不安は想像以上のものでした。それから毎日が決断の連続。この間、日々状況が変化するコロナ対応をはじめ、自然災害時の緊急対応など、たくさんの諸先輩方に相談し、御助言をいただきながら、様々なことに何とか対応してまいりました。半年が過ぎ、学校にも少しずつ慣れてきましたが、校長室の本棚にある「廣瀬川」を拝見し、受け継がれてきた学校経営に対する熱い思いに触れ、改めて校長という責務の重さを感じています。本校は、全校児童が42名の小規模校です。人数が少ないからこそ、子供たち同士、子供と教職員、また地域の方々とも顔が見える関係ができています。全職員、地域全体で子供たちを見守り、子供たちも異学年で遊んだり学んだりすることができます。お互いに顔が分かるからこそできる活動を大切に、子供たちや教職員が持っている力を十分発揮できるような学校経営を目指し、日々、努力していきたいと思えます。

伝統とともに

當房 正浩 (根白石小学校)

本校には「アセ踊り」の伝承活動があります。保存会の皆様の指導を得ながら高学年児童は、学芸会や「冠のふるさと伝承まつり」などの地域の催し物に参加しています。そこでの発表を通して子供たちは自信を付け、下級生の憧れの存在となっていきます。12月には、6年生が4年生に踊りの伝承をし、5年生は新たなリーダーとして自覚していきます。2年間踊り続けることで気付くことがあります。踊りを通して知る保存会の方の思いやアセ踊りが生まれた当時の方々の思い、受け継ぐことで生まれる高学年の自覚、リーダーとしての責任が生まれてきます。地域を愛する子供、自分たちを大切にしてくれ

る気持ちを受けて自分自身を大切にすることを育てていきます。学校は、そんな子供たちを支え一緒に活動しながらこの地域に育ったことを自慢できる子供に育てていきたいと思っています。一つ一つの積み重ねや思いによって伝統がつくられ、受け継がれます。そんな地道な学校経営を行っていきたいと思いません。

地域と共に歩む学校

井上 竜一 (泉ヶ丘小学校)

本校の学習発表会では、5年生児童が地域に伝わる仙台市無形民俗文化財「大沢の田植踊」を毎年披露しています。今年も「田植踊保存会」の皆様が何度も学校へ足を運んで子供たちを指導してくださいました。そのおかげで、本番は見事な演技を見ていただくことができました。5年生の踊りを通して、伝統を受け継ぐことの大切さや地域の方々と協働して何かを作り上げることのすばらしさを実感することができました。

ほかにも本校では、朝の通学路の見守りや学校花壇整備のボランティアなど、地域の方々の御協力をたくさんいただいています。子供たちのために力になりたいという、熱い思いを強く感じています。

本校のキャッチフレーズは「地域と共に歩む泉ヶ丘小学校～『明るいあいさつ』が飛び交う泉ヶ丘」です。そのことばのとおり、朝の通学路では、子供

たちと地域の方々が笑顔で挨拶を交わしている温かい場面をたくさん見ることができます。地域と共に、良き伝統を守りながら、子供たちのためにできることは何かをしっかりと考えていきたいです。

子供たちが育つ地域とともに

武田 千明 (高森東小学校)

朝、校門に立っていると、頭を下げて挨拶をする児童や高森中学校の生徒の皆さん。子供たちのこの姿は一体どのように育まれたものなのかと、着任後すぐに疑問に思いました。これまでの学校教育と家庭教育のたまものであることには間違いありませんが、そればかりではなく、この地域の学校に対する熱意や心強い協力体制によるところも大きいと、やがて確信しました。地域の方々の思いに「子供たちが巣立った後に故郷を思い出すような美しい故郷創出」があり、そのために御尽力されていると常々うかがいます。この地域力を大きな追い風とすべく学校運営協議会を設立し、11月には運営委員の皆様と教職員とで熟議を行いました。教職員の願いの実現や困り感の解消のために何とか力になりたいと、運営委員の方々から申し出がありました。正にコミュニティ・スクールとして動き出す瞬間でした。

今後は校長として、地域に開かれた教育課程の実施、そして地域とともに歩む学校を目指してまいります。

編集後記

新型コロナウイルスの感染は収まることなく、新年には「第8波」が到来したと報道されています。併せて、インフルエンザも同時流行するとの情報もあります。学校現場では感染対策をしながらも、着実に教育活動を進めなければならず、危機感を高めながら日々を過ごしているところです。このような状況の中、会員の皆様のお協力により、このたび「廣瀬川」103号を発行することができました。

発行に際し、御多用の中、玉稿を賜りました校長先生方に感謝申し上げます。

ありがとうございました。

(103号担当チーフ 大友 記)

編集担当者：大友 英之（沖野東小） 工藤 良幸（南光台東小） 山根 斉（南中山小）